

グローバル・ヒストリーのための非英語史料編纂所の設立

① ビジョンの概要

現在世界で進行中の史料画像オンライン公開とグローバル・ヒストリー構築の努力をリンクさせるために、英語と日本語以外の多言語の史料を日本語と英語の史料集として編纂する非英語史料編纂所 (Historiographical Institute for Non-English Sources、略称 HINES) を設立する。それにより、我が国の近代歴史学 150 年の蓄積を次世代に継承し、その成果を広く世界と共有していくことを目的とする。

② ビジョンの内容

現在世界中で、歴史学の基礎となる史料の画像デジタル化とオンライン公開が進行している (状況 1) (図 1)。それにより、史料利用環境の世界標準化が進行しつつある。一方、英語圏を中心に、ヨーロッパ中心主義の打破と、グローバル・ヒストリー (以下、GH) の理論的構築が目指されている (状況 2)。

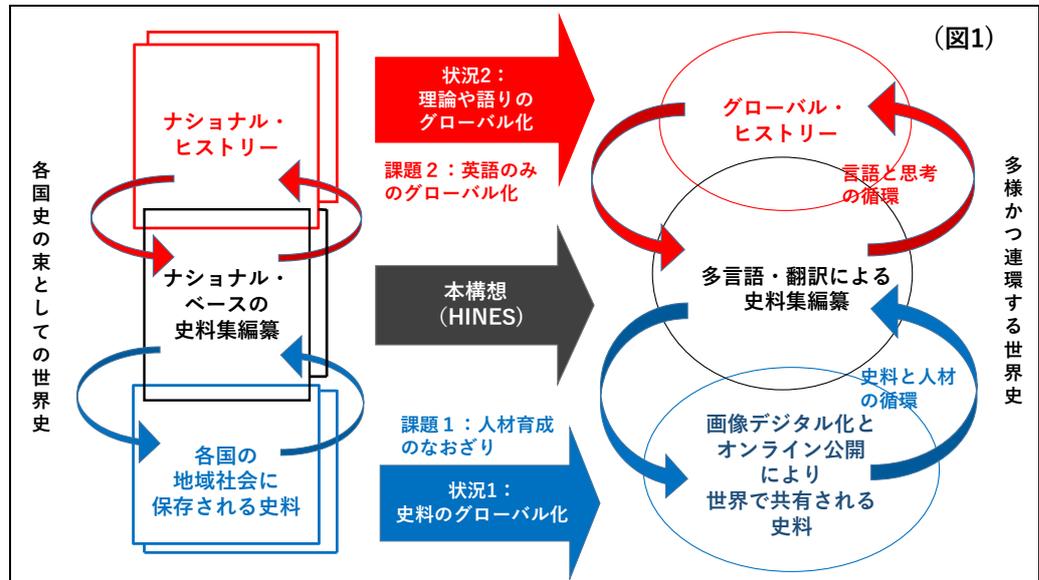


図 1 歴史学の3要素のグローバル化

だが、2つの課題が、顕在化しつつある。課題の1は、デジタル化とオンライン公開のみが先行した結果、史料を正確に読みとくことができる人材の育成がなおざりとなっていることである。従来、史料が読める人材の育成に寄与してきたのは、国単位で体系的、組織的に行われてきた史料集の編纂であるが、現在世界各国で衰退している。課題の2は、課題1と連動する、GHの英語への過度な傾斜である。今まで歴史学の思考 (理論や語り) を支えてきた各国の史料集編纂が弱体化すれば、実際にはそれに依拠してきたGHは基盤を失う。将来的には、GHが、限られた英語史料によってのみ書かれる偏った歴史になりかねない。

課題1と2はこれまで別個の問題として認識され、効果的な対応策が示されているとは言いがたい。それに対し本構想は、グローバルな史料の公開 (状況1) とGHの構築 (状況2) を相互に関係する一連の動きとして理解し、2つの課題を解決するための方策として、多言語史料の翻訳史料集の編纂を提案する。

各国史中心の史料集編纂をグローバル化に対応させ、史料・史料集編纂・理論や語りという歴史学の3要素が循環しつつ発展するという従来の構図を、グローバルに実現することができれば、現在のGHの水準を超える、多様性と信頼性を同時に担保した、真に世界中の誰もが「自分たちの歴史」として一緒に考え参加できる歴史学のプラットフォームの構築に寄与する基盤となるであろう。

史料集の編纂のためには、長年にわたる経験と技能の研鑽、後継の育成が必要である。ましてや、グローバルな視野での史料集編纂は管見の限り試みられたことがなく、方法も確立されていない。しかし、我が国の歴史学においては、東洋史、西洋史が多言語の史料を精読し、翻訳し、史料集を編纂してきた。さらには日本史分野でも、東京大学史料編纂所 (以下、HI) 海外史料室を中心に、体系的、組織的に多言語史料に取り組んできた。歴史学の流行に惑わされることなく辛抱強く史料に向き合うことは、多くの労苦を伴うが、世界人類の共通の財産となるであろう。

③ 学術研究構想の名称

グローバル・ヒストリーのための非英語史料編纂所の設立

④ 学術研究構想の概要

本構想では、GHを「世界中の誰もが一緒に考え、参加できる歴史学のプラットフォーム」と定義する。それは各国史のつなぎ合わせでは実現しない。互いの歴史観がぶつかり合う状況を克服するには、史料に立ち返って、ともに普遍的なテーマに取り組むことが有益である。対象となる史料選定においては、日本との関係を重視しつつ、交流史、移民史、災害史、環境史など世界的な問題に関するものを選ぶこととし、当面は、16世紀以降19世紀までを扱う。19世紀には、今の我々の思考を支えるとともに、制限を加える様々な概念（「主権」「宗教」など）が生まれた。それらの成り立ちを理解するとともに、将来に向けて我々の思考を柔軟にしていくためには、それらの概念が成立する以前を知ることに大きな意味がある。

⑤ 学術的な意義

歴史学に限らず、我が国の近代学問は、様々な文献や史料を、主にヨーロッパ言語から、漢語を多用する日本語へと翻訳することに力を注いできた。この営みは、世界的に見て特色ある、我が国の近代学問の根幹である。ヨーロッパ言語と漢語に内包される世界観を何とかつなぎ続けてきた努力とその蓄積は、多様性の中の共存が求められる今日こそ、広く世界のために活かされるべきである。

とはいえ、日本語への翻訳は日本語を理解する人にしか理解されないという欠陥を持っており、ここ150年の我が国の学問が本質的に輸入学問だったことは否めない。今必要なのは、我々の考えを日本人のみに価値のあるものから世界的に価値のあるものへと昇華させ、世界の人々にわかる形で発信していくことである。翻訳は、独創的な問いや発想を獲得することを助け、国際的に独自の貢献を行うための有効な方法となりうる。また国内的には、学問の基礎的作業として、扱う地域や言語、方法論などを異にする個別の学問分野の懸け橋となるだろう。

HINESの本務である史料集編纂においては、日本語への翻訳だけでなく、英文要旨も作り、世界に発信する。HINESの個々の研究者には、GH構築に寄与するための積極的な研究成果発表が求められる。そのためにも、構成員の多様性を重視し、国際WS開催など、対話のための多様な場を確保する。我が国の歴史学において経験が浅い英語での論文執筆や著書刊行のためには、発信担当部門が組織的な支援を行い、ノウハウを培って公開する。

⑥ 国内外の研究動向と当該構想の位置付け

国内では従来の東洋史、西洋史の退潮が著しく、日本史は史料画像のデジタル化に力を削がれている。

GHは、英語圏を中心に拡大中であるが、ヨーロッパ中心主義の克服を掲げつつも、ヨーロッパ言語だけ、欧米の研究者だけで研究を進めがちである。そのため、GH研究の中で日本人研究者の参加は不可欠な要素として重宝されるが、国内ではGHが支持を得ているとは言えない。国内でのGHに向けての取り組みは個別に行われており、その成果は十分継承されていない。本構想は、今までの達成を踏まえつつ、海外の動きともつなげていく。

⑦ 社会的価値

日本国民は歴史への関心が高く、本構想は理解が得られると思う。様々な言語で書かれた史料の日本語訳を作ることは、国民の利益になるだろう。また、依然として西洋偏重の歴史学に批判の目を向け、歴史学の世界的発展に貢献し、より公正な世界の実現に寄与しようとする点でSDG10、16、17等にもつながる。AI時代における人間の知的営為を追求することも、本構想の課題である。IT産業の隆盛の中で衰退しつつある出版業の中で培われてきた高度な知的技能を保全しつつ、IT時代に活かしていくことも目指す。

⑧ 実施計画等について

実施計画・スケジュール 初年次には、人選、構想の共有を行い、2～3年次に書目や公開方法の策定をし、4～7年次に編纂、8～9年次に成果公開、10年次に振り返りと次期書目の策定を行う。

実施機関と実施体制 HI海外史料室を中心に、HIを拠点として、東京大学内に設置する。HINESには3部門（欧文史料部門、アジア言語史料部門、発信担当部門）を設ける。総経費10年間で、約84億円。

所要経費 史料集編纂にはパーマネント・ポストを持つ専任の教員が不可欠である。10年間で、約84億円。

⑨ 連絡先

松方 冬子（東京大学史料編纂所）